

スポーツ界における LGBT フレンドリーの実現をめざして  
—東京 2020 のレガシーとして何を残すか—

神奈川大学 大竹ゼミナール チーム J

○五十嵐 悠也 鈴木 喬大 西村 優希 宮坂 奈々 宇恵 南

## 1. 緒言

LGBT という言葉をどれくらいの人知っているだろうか。LGBT とは、レズビアン（女性同愛者）、ゲイ（男性同愛者）、バイセクシャル（両性愛者）、トランスジェンダー（性別越境者）のそれぞれ英語の頭文字をとった単語である。この呼び方を聞いたことがあっても、内容を正確に理解している人は少ないかもしれない。しかし、電通ダイバーシティ・ラボ（2015）によると、日本におけるその割合が人口の 7.6% 存在する。スポーツ界においても、2014 年の五輪憲章から性的指向による差別の禁止が明記され、リオ五輪では 50 人以上の選手が LGBT であることを公言した。世界的にも LGBT が認知されてきているが、一般的にカミングアウトすることは決して容易ではない。GLSEN（2011）によると、アメリカの LGBT の生徒が学校で不安感を抱いて避けようとする場所が、更衣室やトイレ、体育やスポーツに関する場所などが半数を占めていた。このようにスポーツ界では、更衣室やユニフォーム等の男女の物理的な区別や、根強く残るホモフォビア（同性愛嫌悪）などが存在し、カミングアウトできる環境として十分ではない。

現代社会で多様性を尊重する中、LGBT に対する問題は避けて通れない。しかし、LGBT に対する社会全体の意識改革は非常に困難を極めるため、私たちは社会へ強い発信力や影響力をもつスポーツ界での意識改革を第一歩と考えた。そこで本提言では、第一段階としてスポーツ界における LGBT フレンドリー<sup>注1</sup>の実現を目指した政策を提言する。第二段階としてスポーツ界から社会へ発信し、結果的に世の中の LGBT に対する意識改革を行い、誰もが住み良い多様性社会の構築を目指していく。

## 2. 研究方法・結果及び考察

### （1） 先行研究にみる LGBT に関する現状と課題

#### ア. 学校で LGBT であることをカミングアウトできない要因調査（日高 2016）

- ・生活における「いじめ」を全体の約 6 割が経験し、いじめ全体の 63.8% が「ホモ・おかま・おとこおんな」等の言葉によるいじめである。
- ・学校教育における同性愛についての知識は全体の 7 割が「一切習ってない」。
- ・LGBT への理解が不十分でカミングアウトするにはハイリスクである。

#### イ. スポーツ界における LGBT に対する問題調査（日本スポーツ協会 2017）

- ・6 割以上のスポーツ指導者が LGBT に関する情報収集の必要性を感じている。

- ・実際に LGBT の学習行動を行っている指導者は 3 割ほどである。
- ・指導者からの要望の中で、「指導者講習会の内容に含めてほしい」「情報がほしい」等が多数を占めていた。

## (2) ヒアリング調査

ア. 対 象：横浜市教育委員会事務局 人権教育・児童生徒課 主任指導主事担当

目 的：LGBT に対する教員の意識レベル、学校での実態を調査する。

日 時：2018 年 9 月 12 日

①	LGBTに対する現場職員の意識レベルについて ・学習指導要領に記載されていないため、理解度は低い。 ・平成27年度文部科学省の通知により、教員の意識はここ3～4年で高まっている。
②	LGBTの生徒に対する学校での配慮について ・共通したルールはない。 ・学校単位で、体育の授業では男女共修の推進や、制服・髪形は本人の希望を尊重している。
③	部活動での対応について 横浜市内の中学校で女子生徒が男子サッカー部に所属することを認め、公式戦に出場している事例もあるがサッカー部以外では確認できず。
④	LGBTを理解するための啓発活動について ・教員向けの研修は少しずつ増加しているが、一律ではない。 ・全生徒向けに、当事者と呼んで学習会や交流会を開いている学校もある。

(表 1)

イ. 対 象：元フェンシング女子日本代表 トランスジェンダー活動家 杉山文野氏

目 的：当事者から見た、スポーツ界における LGBT に対する課題調査

日 時：2018 年 9 月 13 日

①	スポーツ界のLGBTの課題について ・身体の差があるため、公平性と倫理性の葛藤がうまれる。 ・「男は男らしく」等というスポーツ界ならではの固定概念が深く根付いている。 ・スポンサーやファン、協会との信頼関係がないと、カミングアウトすることが難しい。 ・LGBTのアスリートのロールモデルが無い。
②	LGBTに対する本質的な課題について ・少数派を排除しようとする日本特有の意識や、ダイバーシティの理解が発展途上である。 ・多数派の人々の理解が少ない。
③	今後取り組むべき課題について ・世界的にもアライ <sup>注2</sup> は増えてきているが、日本全体は少ない。 ・LGBTの存在が可視化されていない。

(表 2)

## (3) 考察

ア. 教育現場や職場において LGBT への理解・認知度は高まってきているが、義務化された制度がないため浸透していない。

イ. 競技性を問うスポーツ界では、男女を区別する固定概念が深く根付いているため、多様性を推進する妨げとなっている。

ウ. 多数派の理解が乏しいため、少数派が生きづらい社会が形成されている。

### 3. 提言

(1) スポーツ界での LGBT に対する意識を改革するための 3つの政策モデルを提言する。



(図1) 3つの政策の役割

#### ア. 「知る」(提言先：日本スポーツ協会)

スポーツ指導者への LGBT に関する情報提供が不透明なことから、スポーツ指導者が LGBT を「知る」ために、公認スポーツ指導者と運動部の顧問を対象とした研修を実施

(表3) 研修プログラムの内容

する。日本スポーツ協会と LGBT 支援団体が連携し、定期的に研修を開くことで、多くの指導者が日程を合わせて参加できる仕組みをつくる。研修でインプットした情報を、各学校・クラブチームの子ども達にアウトプットするために、話し合いの場を設けることを義務化する。

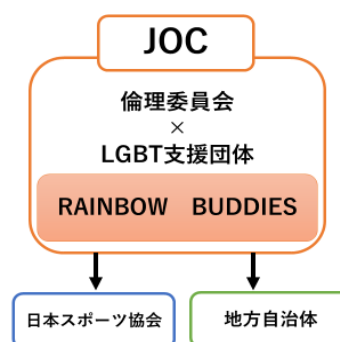
	研修プログラム
①	学習：多様性の意義
②	学習：LGBTの理解、スポーツ界での課題
③	学習：スポーツ指導における留意点
④	グループディスカッション：指導者間の意見交換

#### イ. 「行動する」(提言先：JOC)

日常生活の中で LGBT 当事者とそうでない者が交流する機会が乏しい。そこで、スポーツを通じて両者が交流する機会を生み出すことを目的とし、JOC が主体となるランニングイベント「レインボーラン」を提案する。多様性の象徴的な色として用いられるレインボーと競技性を問わないランニングを掛け合わせ、商業施設の名称になっていることで、ダイバーシティを連想させるお台場で開催し、レインボーブリッジを通過するコース設定をする等、発信力の高い PR 活動を行う。イベントの開会式では LGBT のアスリートによる講話等、イベント開催の意義を参加者に伝える場を設ける。仮設の多目的更衣室・トイレを設置し、当事者の心理的不安を取り除く。協賛企業を募り物資等の支援を依頼することで、企業の宣伝効果やイメージアップにつながる。東京 2020 ボランティアを活用し円滑なイベント運営を支えながら、東京 2020 が多様性を重んじた大会になるよう、その意義を理解するきっかけとする。

#### ウ. 「支える」(提言先：JOC)

ロールモデルが無い原因として、スポーツ界ではカミングアウトした際にスポンサーやファン、協会との関係が危ぶまれるという事が挙げられる。そこで、当事者とステークホルダーの関係を維持できる仕組みづくりが必要である。JOC の中に LGBT 競技者を支援することを目的とした組織「RAINBOW BUDDIES」を創設する。本組織は、LGBT 競技者への相談窓口の開設やイベント主催、スポンサーと LGBT アスリートの仲介等



をすると共に、日本スポーツ協会・地方自治体と協力し、当事者保護を目的としたルール作り・各地域における啓発活動をする事で、当事者を多方面から支援し、居心地の良いスポーツ界の実現を目指す。

#### (2) 社会の意識を改革するための政策提言（提言先：JOC）

オリンピックの理念の中に「スポーツを通じた平和と友好」を唱えている。これに則り、性的少数者を含む全ての人々が心の平和と友好を分かち合うために、前述の3つの政策を踏まえ以下の活動を行うことで社会の意識改革へつなげる。

ア. PR動画：LGBTを含む少数派の啓発動画をオリンピック開催前に動画投稿サイトやSNSに公開することで、日本社会に多様性の尊重を発信する。動画には社会に対して強い影響力を持つ、オリンピック出場アスリートを起用する。

イ. ボランティアの活用：東京2020ボランティアに対し、多様性の理解を示すためにレインボー柄のリストバンドを着用させ、話題性を持たす。

ウ. 開会式：選手宣誓の際にレインボーフラッグを掲揚し、旗の意義（多様性の尊重とLGBTの尊厳）を伝える。

エ. 閉会式：プロジェクションマッピングで陸上トラックに虹を描き、会場が一体となる演出を施す。最後に日本の都知事からパリの市長にレインボーフラッグを引き継ぐ。

#### 4. まとめ

東京都は今年10月初めに、「東京都オリンピック憲章にうたわれる人権尊重の理念の実現を目指す条例案」を可決した。条例では、性的少数者を理由にした差別の禁止を公表し、東京2020へ向けて多様性社会の構築が進められていき、スポーツ界におけるLGBTフレンドリーの実現がオリンピックの一つのレガシーとなる。日本は、2019年ラグビーW杯、2020年東京オリ・パラ、2021年関西ワールドマスターズゲームズのゴールデン・スポーツイヤーズを迎える。これらの祭典は世界中から注目され大きな発信力となるであろう。

◆注1) LGBTの人々に対して温かく開かれた場所。（アウト・ジャパンより）

注2) セクシャリティへの理解者・支援者。（rainbow projectより）

#### <参考文献>

GLSEN (2011) The 2011 National School Climate Survey

日高康晴 (2016) LGBT当事者の意識調査 ～いじめ問題と職場環境等の課題～

日本スポーツ協会 (2017) スポーツ指導者に求められる指導上の配慮に関する調査

杉山文野 (2006) ダブルハッピーネス 講談社